



Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

No.
53

発行日：2012年3月20日

発行者：田中 真 / 編集者：小笠原 宏司 / レイアウト：鈴木 博文

第1回上智大学全国高校英語弁論大会（ジョン・ニッセル杯） 開催される

上智大学外国語学部英語学科教授 東郷 公徳

2011年12月17日（土）午後1時より、上智大学四谷キャンパス10号館講堂において、上智大学で行われる最初の全国の高校生を対象とした英語弁論大会が行われました。この大会は、英語学科が主催し、多くの団体や企業からの協力を受けて開催されましたが、英語学科同窓会（SELDA）も後援団体に名を連ね、1位から3位までの入賞者に授与される盾がSELDAによって寄贈されました。以下、この弁論大会が開かれるまでの経緯と予備審査、本選の様子と結果について、簡単にご報告致します。

経緯

英語学科には、故フォーブス師らが作った『ブリタニカ英会話教材』の印税収入を基にした「ブリタニカ予算」と呼ばれる基金があり、年間100万円程度が英語教育の発展に資する目的にかなった研究教育活動のために使われて来ましたが、これまで中々有効な活用が出来ずにいました。この予算をより有意義に活用する方法として発

案されたのが、この英語弁論大会でした。この大会に我々が恩師ジョン・ニッセル先生の名前を付けるというのは、実は高祖敏明理事長の提案でした。この大会が続く限り、ニッセル先生の名前が多くの人の目に触れ続けることになり、とても良かったと思います。

1次審査

原稿と録音による1次審査は昨年7月末を締め切りとなりましたが、全国の高校生から245件の応募がありました。これを英語学科の教員の半分あまりが夏休み中に原稿を分担して読み、まず50名を選びました。この50名について、今度は数名の教員が録音を聴いて審査を行い、本選参加者20名を選びました。

本選

本選は2011年12月17日（土）午後1時から、上智大学10号館講堂で行われました。審査委員長は、現在上智短期大学学長でもあるスコット・ハウエル師が務めました。審査委員としては英語学科同窓会会長である田中真氏を



はじめ、次の4名の方々にお願いしました。（敬称略）

吉田 研作 上智大学外国語学部教授
 向後 秀明 文部科学省教科調査官
 田中 真 英語学科同窓会会長
 道傳 愛子 NHK解説委員

本選に出場した20名の高校生たちのスピーチはどれも素晴らしく、会場の聴衆に感銘を与えました。審査の結果、6名の皆さんが入賞しました。（下の表参照）

優勝者にはソフィア会から寄贈された優勝カップが審査委員長のハウエル先生から手渡されました。また3位までに入賞した3名には、英語学科同窓会から寄贈された綺麗な赤い盾（写真右）が、田中真会長自身の手によって授与されました。その他、協賛企業からの多くの賞品が入賞者や本選参加者全員にそれぞれ贈られました。

本選の後、2号館5階の学生食堂でレセプションが行わ



れ、和やかな雰囲気の中で、参加者、審査員、当日の運営を担当した総務局の職員や英語学科の学生たちなど関係者一同がお互いに交流を深めました。これを機会に上智大学に是非進学したいと強く思うようになったと語っていた高校生もいて、彼らにキャンパスで会えることが楽しみです。

最後に

なにぶん初めての試みだったので、試行錯誤の連続でした。この大会が無事に成功したのは、英語学科同窓会のご協力のもとより、多くの方々のご支援があったからこそであったと実感しています。ご協力に心から感謝いたします。これから、この大会をさらに発展させ、ジョン・ニッセルの名前を全国津々浦々にまで広めて行きたいと考えています。今後、一層のご理解とご支援をいただきますよう、どうかよろしくお願い致します。



優勝の山本菜々子さん

第1回上智大学全国高校生英語弁論大会（ジョン・ニッセル杯）入賞者

順位	氏名	タイトル	学校名	学年
1位	山本 菜々子	The Never-Ending Tragedy	開明高等学校	1年
2位	玉村 香織	Empathy	愛知県立千種高等学校	2年
3位	ビッシェル 友樹	AN EARLY START IN BUSINESS	上智福岡高等学校	2年
4位	小林 沙英	Balancing Flags	神戸市立葺合高等学校	2年
5位	田中 佑布子	It's never too late to start	関東国際高等学校	2年
6位	中野 有紗	Gender-equal family	早稲田佐賀高等学校	2年



SELDAの未来に向けて

上智大学英語学科同窓会会長 田中 真

SELDAの会長という重責を引き受けてあつという間に2年が過ぎようとしています。その間に、私たちは自分自身の人生観すら変えてしまうほどの大震災を経験しました。今なお復興に向けて懸命に努力する方々と、それを支援する団体や個人とのつながりを見るにつけ、お互いを思いやる気持ちの大切さを痛感しています。

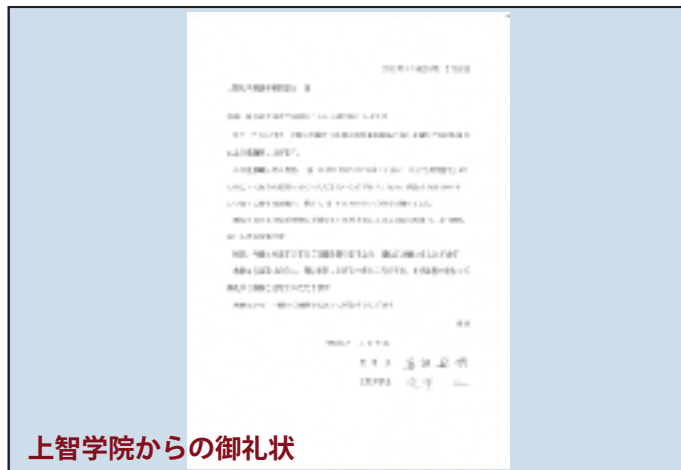
同窓会活動は、当初からの活動方針に沿って、SELDA会員と大学、ソフィア会、英語学科教職員や現役学生とのつながりの中で、さまざまなイベントを実施してきました。その一部は本会報に掲載されておりますが、特に今年度の試みとして、ソフィアルネッサンス連続講演会および全国高校英語弁論大会（ジョン・ニッセル杯）に対する共催および後援団体として参画、主催者や関係者の皆様から感謝の言葉を頂き、SELDAの存在感を高めることができました。

今年に入ってから、常任委員会では来年度の活動に向けた準備を開始しています。まずは、恒例となった「オール英語学科の集い」、今年も5月27日（日）のASFに合わせて開催します。現役学生を含めた幅広い層での「絆」を分かち合う場にしたいと考えています。恩師による模擬授業、学年ごとのミニクラス会、地域別STP同窓会等々、加えて、当日の飛び入りゲストが期待できるかもしれません。ぜひ、皆様声を掛け合って、年に一度の出会いを楽しんでください。

話は変わりますが、私たちが現在抱えている課題のひとつに、同窓会活動を将来にわたっていかに持続させて

ゆくかというものがあります。その課題解決のためには新しいものの見方を持った若い世代の参画が不可欠です。このたび、各方面で活躍する卒業間もない会員の方々とこの3月に卒業する有能な後輩達に無理をお願いし、来年度から常任委員会や事務局の活動に加わっていただくことになりました。

彼ら、彼女らの力を得て、来年度は従来の活動にとらわれない、新しい試みも取り入れ、SELDAを中心とした「絆」をさらに広げてゆければと思います。ぜひ、私たちの活動に温かいご支援、ご理解をお願いいたします。



上智学院からの御礼状

SELDAの活動は、会員の皆さんの会費によって成り立っています。8ページの「会費納入のお願いと納入方法」をご覧ください。会費の納入をお願いいたします。

楠瀬淳三先生の思い出

上智大学外国語学部英語学科長 石川 彰

楠瀬先生が2009年6月20日に帰天されて、そろそろ3年になろうとしている。私が1970年英語学科に入学して初めて言葉を交わした学科教員が楠瀬先生だった。もっとも、入学試験の面接で担当だったのも楠瀬先生だったので、なにか因縁めいたものがあるのかもしれない。面接は日本人は野口先生と楠瀬先生に筆記試験の出来について尋ねられた後、もし英語学科に不合格ならどうするかと聞かれたと思う。英語の面接はForbes神父が担当で、質問が聞き取れなくて何度も繰り返していただいた。結局、満足な答えもできなかったのに、寛大な判断で合格させていただいた。口頭試問の形式は今でも原則的にはこの40年前の形式をそのまま踏襲しているので、学科の伝統と言ってもよいだろう。

オリキャンでは帰りの秦野キャンパスで、バスを降りて休憩をしているとき、楠瀬先生が近くにおられて、僕はいろいろの言葉を勉強しているよと言っておられた場面が今でもはっきりと思い出される。その他どんなことを伺ったのかは覚えていないが、ウィーンで買われたキーホルダーを見せていただいたと思う。音楽とかグリークラブとかの話をしたのだと思うが、音楽好きな方だなと感じた。

楠瀬先生と本当に親しく言葉を交わすようになったの



楠瀬淳三名誉教授 2009年6月20日逝去

は、英語学科の教員になってからで、2006年に先生がご退任されるまで、いろいろと親切にしてくださった。先生はどちらかというと饒舌というより、寡黙な人であった。それでも先生の温かい人柄はおのずと人に伝わってきた。時として随分頑固な方だと感じないでもなかったが、いつも一貫した立場で発言されるので、その誠実さがいつまでも記憶に留まっている。その当時の先生方を思い出すと、楠瀬先生に負けず劣らず頑固で意見を曲げない方々が多数おられた。そんな時代をなつかしく思い出す反面、自分も古い時代の人間になったという思いが

ひとしおである。楠瀬先生の深い信仰心については、不信心者の私は語る資格がないが、先生のひたむきな生き様の原点はきっとそこにあるのだろうとずっと思っている。

楠瀬先生の学問的な面に触れたのも、教員になってからで、先生は言語学を通じて言語の深い理解を目指していることが、そのお仕事から推察された。ひとつには修士論文で研究された歴史的な音変化の規則性に関する興味がある。先生のドイツ語好きは有名であった。英語とドイツ語の比較をよく話しておられた。言語の使用に関する語用論でも、メタフォアという言語の創造性の原理に興味を示された。LakoffとJohnsonのMetaphor We Live Byの訳業はこれからも若い人に読まれるであろう。

もう一つは言語哲学の研究である。日常言語学派やワイスマンの哲学を好んで研究されていた。自分も定年が近づき、こうして楠瀬先生の実験者としてのお仕事を振り返ってみると、言語学に対する真剣な取り組みが伝わってくる。真剣さも楠瀬先生の生き方の特徴であった。

この文章をSELDA会長の田中氏から依頼されて、楠瀬先生のことを思い出していたら、音楽好きで毎年のようにウィーンに出かけた話をされていたこと、登山が好きで毎週のように近郊の山を登っておられたこと、それが嵩じてキリマンジャロなどいくつもの高峰の登頂を達成されたことが思い出された。登山や音楽の話をされているときの先生のニコニコと笑っておられる顔も蘇ってきた。

グラチアーノ先生を偲んで

秋山 玲（1999年卒業）

グラチアーノ先生は、一言では説明できない、多様な側面をお持ちの方です。それが先生の大きな魅力です。

グラチアーノ先生のお名前を聞くとまず思い浮かぶのが、クリッとした優しい目と微笑みをたたえた口元です。留学期間中だった1年を除き、担任していただいてお世話になった3年間で、少なくとも私は一度も先生が怒るところをお見かけしたことはありません。いつお会いしても笑顔を絶やされることがありませんでした。

独特なダジャレのセンス（？）も秀逸でした。英単語“sorry”の発音について、日本語「総理」を持ち出して説明なさったのが、とても印象的です。そして先生いわく「ニューヨークスタイル」の、個性的なファッションのセンス。そういったユニークさから、学生は先生に対して好感を持ち、結果として親しみを込めた、いささか失礼な愛称で先生を呼ぶこととなりました。

優しさや親しみにあふれる先生の雰囲気からだけでなく、私には更なる強い親近感を持つに至る理由がありました。先生はイタリア系であるという文化的背景をお持ちであり、私個人のそれと重なったからです。

さらに先生には、スポーツマンであり強いお体をお持ちだという側面もありました。体育会ヨット部の顧問をされ、体力をお持ちであることを披露するため、STPで訪れた下関のファミリーレストランで電柱によじ登ってみせたというエピソードもある程です。

一方で、「マルチメディア」をキーワードに英語教育に先駆的な内容を導入していらっしゃいました。近現代英米文学を教材にオリジナルの教科書を作成され、読解



George Graziano名誉教授 2011年3月9日逝去

とリスニングの二つの内容を効果的に講義に組み入れていらっしゃいました。小説の読解の講義を行い、またその小説の映画から取り入れたスクリプトを映像とともに使用し、リスニングの講義も行うという内容でした。私たちが入学した当初は、95年のWindows発売を契機にインターネットやEメールが大きく普及し始めた頃であり、ワープロすら満足に使いこなせていなかった私にとっては斬新な授業でした。

個性豊かなグラチアーノ先生のことを忘れることは絶対にありません。もうお会いできないと思うと残念でなりません。心からご冥福をお祈り致します。

ペティート先生を偲んで

酒井 絵理子（1999年卒業）

初めてペティート先生を知ったのは、入学直後のオリエンテーション・キャンプで配られた教員紹介の冊子でした。先生方の簡単な自己紹介とともに、好きな言葉と学生へのメッセージが書かれたものでしたが、ペティート先生のページには、ひとこと「Go for it.」とだけ書いて

ありました。夢を抱えた新生に熱いメッセージを書かれる先生が多い中、ひとことだけとは、正直なところ、少し冷たい先生なのかなという印象を受けました。

実際にお会いするとその印象はがらりと変わりました。コースの最初の授業で、ジーンズ姿の先生が教室に入ってきたかと思うと、いきなり「俺、デニーっていうんだ」と言って、机に腰掛けたのです。「教授」と呼ばれる方が、そこまでフランクだということに大変驚きを受けました。その後も、生徒から「先生」、「Mr. Petite」な

どと呼ばれるたびに、「俺、デニーっていうんだ」と繰り返し、生徒が「デニー」と呼ぶまで話が進まなかったものです。ですから、ここでも、「デニー」と呼ばせて



Paul Dennis Petite教授 2011年10月2日逝去

いただきます。私が知る限り、デニーほど、オフィスに人が集まる先生はいませんでした。「Denny's Bar」と称されたオフィスには、夕方になると、先生方、職員の方々、生徒や卒業生など、たくさんの人が集まりました。（お断りいたしますと、デニーは、オフィスアワー中は、一切アルコールを口にしませんでした。）

Denny's Barでは、他愛もない話をすることもあれば、将来の夢や、挑戦したいことを話すこともありました。

「危ない」「非現実的」などと否定されるのではないかと思うようなことでも、「やってみれば」と、あっさりと、しかし、確実に励ましてもらったものです。どんな話をしたかは、今はもう覚えていませんが、「やってみれば」というアドバイスだけは決して忘れません。

振り返ると、「Go for it.」という言葉ほど、デニーから受けた影響を端的に表す言葉はありません。冷たいだなんてとんでもなく、生徒の可能性を広げたいという、思いやりにあふれたメッセージであったと思います。

もう二度とお会いできないことが本当に残念です。心からご冥福をお祈りいたします。



還暦を臨んでの近況報告

石埜 茂（1975年卒業）

英語学科卒業ながら、ちょっと畑違いなソフトウェア会社に就職し、現在まで情報処理関係の仕事をしています。就職当時（1975年）は、ほとんどの人がコンピュータを見たことはなくて、磁気テープがクルクル回っている映像等でしかイメージできなかった時代でした。私もプログラミングはまったくの専門外の領域でしたが、コンピュータのキーボードを見て、これは大学時代使っていたタイプライターと同じ配列だなと、それほど違和感なく取り組めた思い出があります。当時は、大型コンピュータに日本語を対応させる時期で、カナから漢字への変換システムの構築に参画していました。その後、マイコン等コンピュータの小型化が進み、日本語処理のノウハウを生かした、中国語ワープロや韓国語のワープロの開発にも従事しました。東南アジアを中心に展示会・商談会等でセールスもしてきました。まだ今ほど発展していなかった80年代の中国各都市を巡った時は、市民生活のギャップに驚いたり、少し心配しながら訪れた東北の瀋陽市では日本語で親しく話しかけてくる人もいたことなど、懐かしい記憶がよみがえってきます。もちろん、英語圏以外の国でも英語が強力なコミュニケーション手段だったのは言うまでもありません。

その後、専門学校へ転職して、情報系学科の新設にかかわり、15年前に独立して、現在は地元である群馬県みどり市にて、情報系コンサル事業、ソフトウェア開発及びホームページ作成を主とした、株式会社アイクルを営んでいます。また、個人の資格として、行政庁へ

の手続きや権利義務に関する書類作成、知的資産経営の支援等を行う、行政書士の業務も行っています。

最近のトピックとして、「群馬ソフィア会」の立ち上げがあります。2010年に、町田久さん（72理工卒）が発起人となって、県内500有余名のソフィアンに呼びかけて、会を発足させました。私自身幹事長を仰せつかっていますが、会の役員の中には英語学科のOBもいるので大変心強く感じています。2010年には石澤学長、2011年には滝澤学長をお招きしての講演会を実施し、母校の様子を聞くことができ、またソフィアン同士の交流もできて有意義な会となっています。しかしながら、県内ソフィアンにはまだ充分には周知されていないので、この会報を見て是非参加いただけるよう望んでいます。



この会をきっかけに、Facebookの輪も広がっています。個人のライフワークとしては、NPO活動の一環でメンタルヘルスケア活動を行っています。今年年間自殺者が3万人を超え続け、「うつ病」等の精神的不調に悩んでいる方が急増しています。特に、厳しい経済状況のもと中小企業経営者の悩みは深いものがあり、そうした経営者を対象とした「e-learningシステム」を構築しました。これは、インターネットを通じて、好きな時間に好きな場所で、メンタルヘルスに関する知識や専門家の意見を聞くことのできるシステムです。本来は、群馬県内の中小企業経営者向けに無料で使えるシステムですが、興味のある方は個人でも、あるいは、県外の方でも問い合わせには応じていますので、お気軽に問い合わせください。私もまもなく還暦を迎える歳になりましたが、こうして振り返ってみると、英語学科を卒業したこと、また、ソフィアンとの交流が心の大きな支えとなっているのがわかります。とはいうものの、ソフィアンはシャイな方が多いようで、特に地方では存在感が薄い感じがします。これからも母校を大いにアピールできるよう微力ながら活動していきたいと思います。

(E-Mail ishino@isclue.co.jp)

「指どうしたの？」

佐藤 宏美（2000年卒業）

ここは東部アフリカ、内陸国であるウガンダの首都カンパラ。スーパーの野菜売り場でピーマンを量りに乗せていた時、突然店員に声をかけられた。「指？なにが？」とっさに自分の両手を見ると、左の人差し指に小さな絆創膏を貼っていた事を思い出した。その朝切れない包丁でかすっただけの、忘れていた傷だった。「ああ、これナッシングだよ。もう痛くないし。」そう彼に返すと、「オーマダム、痛かったでしょ、ソーリー、ソーリー...」彼ははにかんだ笑顔で、「早く治りますように」と私のために祈ってくれた。

国際協力機構（JICA）が派遣する「青年海外協力隊」の現地業務調整員として、ウガンダに派遣されてから3年が経った。ウガンダでは現在約90名の協力隊員が活動中であり、私はその中の「稲作普及隊員」を担当する業務調整員である。現在JICAはアフリカでの稲作の普及に注力している。ウガンダはナイル川からの豊富な水源と火山活動によってうまれた肥沃な土壌を有し、近隣諸国に食物を輸出している、東アフリカの「Food Basket」と呼ばれる国だ。ウガンダにおいて米が貴重な換金作物であること、またウガンダ人自身数ある主食の中でも特に米が大好きであることもあり、政府、そして農民達の稲作への関心は非常に高い。協力隊員は各地方に派遣され、地元の県庁と協力しながら、農民達に稲作の指導を進めている。そんな協力隊員の活動が円滑に進むようサポートするのが、私の仕事である。

この3年間、ウガンダ人の寛容さ、優しさに助けられてきたなあと、今しみじみと感じている。そもそも、私も協力隊員達も、アジアの「日本」という小さな国から来た、外国人の若造である。その若造が突如ウガンダの地方に現れ、「あーしてほしい、こーするべきだ。協力して欲しい」と始めるのだ。お金を渡すわけでもない。

日本だったらどうだろう。そんな見た事もない片言で話す外国人の言う事を聞いてくれるであろうか？しかし、ウガンダ人は「日本人は優秀だからね。僕たちは沢山学びたい。来てくれてありがとう。歓迎するよ、共にがんばろう」、そういって、県庁の予算まで確保してくれることもあるのだ。

そして、どんなに忙しくても「マダム、君は元気かい？ハウイズユアライフ？首都はどうだい？雨は降ったかい？」といつも（長い）挨拶を忘れない。最初は一つ一つ返す答えを考えたものだが、それにはあまり意味がないようだと思いつくのに時間はかからなかった。彼らにとって、私の回答内容よりも、「挨拶を交わす」というコミュニケーションの行為の方が重要なのだ。挨拶中はずっと握手をしたまま、笑顔で向き合う。農民などは「手のひらが汚れているから代わりに」と、手首を差し出してくることも多い。挨拶は礼儀であり、挨拶をされないと「軽んじられた」と思うのだという。挨拶をして、彼らと視線を合わせる度に、いつも温かい気持ちになれた。そして、またこの人達と頑張っていきたい。そんな優しい気持ちで自分の中に芽生えるのを感じるのだ。ちょっと間が抜けたような、決まり文句が繰り返される長い挨拶。私が3年間大好きだったウガンダの習慣だ。

冒頭のスーパーでのウガンダ人店員との一コマは、ウガンダ人の国民性を良く表している一件であった。彼らはよく人のことを見ている。そして興味を持つ。心配する。思慮深く、他人の私のために祈る。「日本に帰ったら、誰か私のかすり傷、心配してくれるかな」と、ふと思った瞬間に、帰国間際だったこともあるが、熱いものがこみ上げ、私はスーパーですすり泣いてしまった（苦笑）。しかし直接的なコミュニケーションが希薄になりつつある日本社会と比べ、常に濃密なコミュニケーションが求められるウガンダには、いつも温かさ、優しさがあった。



日本に帰国して、1ヶ月が経った。3年ぶりの日本の冬は本当に寒く、私の身も心も芯から冷やしてしまう。誰と挨拶をかわすこともなく、マフラーの下に顔を隠して家路に着くとき、ふいに「ヘイ、マダム！ハウアーユー？」というウガンダ人の懐っこい笑顔と白い歯を思い出す。いつも挨拶をかかさないウガンダ人。私が怒ると、逆に笑って慰めるウガンダ人。いつでも興味津々、私の指の小さな傷も見逃さない、優しいウガンダ人。

彼らの笑顔が私をいつも安心させてくれたように、私は彼らに何ができたのかな、そんな思いが繰り返し頭を過り、1万キロ以上離れてしまった遠い国、暖かい国ウガンダ、その国の人々のことを懐かしく思い出している。

「ソフィア・ルネッサンス連続講演会」

第17回に明石康氏登壇

去る1月13日、元国際連合事務次長で、現在は財団法人国際文化会館理事長などを務める明石康氏の講演会が開催されました。この講演会は当初、上智大学外国語学部英語学科および英語学科同窓会（SELDA）によって準備が進められていましたが、講演者の著名度などを鑑み、上智大学創立100周年記念事業として2009年から続いている、「ソフィア・ルネッサンス連続講演会」（上智大学主催、上智大学ソフィア会共催）の一環として位置づけられました。英語学科とSELDAは、ソフィア会とともに共催に名を連ねました。

同連続講演会の2011年度テーマが「国際社会への提言 私達にできること = 国際的な社会貢献活動とグローバルなキャリア形成 =」であることから、明石氏の講演は『グローバルな舞台に必要な力』と題されました。

明石氏は近年、「グローバル人材育成に関する提言ーオール・ジャパンで戦略的に対応せよ」（URL下記①）をまとめた有志懇談会の発起人を務めたり、政府が推進する「グローバル人材育成推進会議」に対して助言を行うなど、グローバル人材育成に積極的に力を注がれています。そんな明石氏の講演とあり、会場は現役学生から卒業生まで100名を超える人たちが満席となりました。

60分の講演の中で明石氏は、日本が加盟を果たした直後の1957年から、日本人初の職員として40年間にわたって勤めた国連でのご経験に基づき、グローバル人材のさまざまな要件について持論を述べられました。中でも、前述の「推進会議」が発表した「中間まとめ」（URL下記②）にも触れながら、グローバルな舞台で活躍しようとする際にとりわけ重要な要素は、主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感である



とし、ただし、こうした資質は日本国内で仕事をする際にも大切なことであり、日本できちんと仕事ができる人は世界でも仕事ができると指摘されました。また、多様な価値観、教育、慣習をもつ人びとが集まる国連という場において、一つの目的に向かって職員を束ね、多くの難題解決に挑まれたご経験から、チームワークの重要性についても強調されました。

講演の最後には、世界にはきっと自分とわかり合える人がいるので、そういう人たちとチームワークを組みながら、国際社会において他流試合に挑み、宝石の原石である自分の力を磨いていって欲しいと参加者への激励の言葉で締めくくられました。

講演に引き続いて行われた質疑応答ならびに懇親会では、明石氏は参加者からの質問にじっくり耳を傾け、丁寧に答えてくださいました。後日、明石氏からは「さすが上智大生。皆さん真面目で熱心ですね」とのお言葉をいただきました。

① http://www.i-house.or.jp/jp/ihj/global_index.htm

② http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/110622chukan_matome.pdf

5月27日（日）「オール英語学科の集い」 3号館123教室にて開催 ＝「集いのひろば」であの恩師や友と再会し、語り合いましょう＝

今年も上智大学のホームカミングディである5月27日（日）、「オールソフィアンの集い（ASF）」において、「オール英語学科の集い」を開催いたします。

昨年は、英語学科草創期を知る小林康司さん（1959年卒）、長谷川幹夫さん（1962年卒）、長谷川真弓さん（1963年卒）、元SELDA会長で現在ソフィア会副会長でもある石川雅弥さん（1965年卒）らの大先輩から若い世代までの多数の同窓生、吉田研作先生をはじめとする英語学科の先生方、更には20名を超える英語学科現役学生の皆さんも参加しての大変賑やかな会となりましたが、本年度は、一層「英語学科・集いのひろば」を充実させて、更に多くの方々のお迎えできるよう準備いたします。

「集いのひろば」は、軽食、アルコール類をご用意し、クラス単位、ゼミ単位、サークル単位の同窓会会場や旧友との待ち合わせ場所としてお使いいただけます。

ご利用をご希望の場合、事前にお知らせいただけましたら、可能な範囲でテーブルの確保なども行います。SELDAホームページ（<http://seldaa.net/>）からお知らせください。

その他、当日の様々な企画につきましては、SELDA



のホームページやFacebookなどを通じてご案内いたします。

昨年度にご参加いただけなかった皆さま、是非今年は、ミニ同窓会や、旧友との再会を企画いただき、「オール英語学科の集い」の部屋（3号館123教室）にお集まりください。心よりお待ちしております。

会費納入のお願いと納入方法

SELDAAは、会長の運営方針にもあるように、従来の同窓生間を対象とした活動に加え、上智学院、ソフィア会、現役学生、他学科同窓会など多方面にわたって交流するよう計画しています。そのためには、会員の皆様からの会費をもとに長期的に安定した収支計画を立てることが前提となります。

今年度は既報のとおり、現役学生を対象にしたセミナーを2回実施いたしました。来年度からはそれに加え、外部講師の招聘や英語学科教員による講演会、その他卒業生、現役学生を交えた交流の場作りなどの実施、および後輩のための上智学院への寄付活動などを計画しています。さらには従来から実施されてきた、会員が企画する勉強会や講演会への支援活動も前向きに進めていく所存です。

会員の皆様からお預かりした貴重な会費は、厳正かつ適正に管理し、透明性を持って運用させていただきますので、同窓会活動へのご理解、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

【会費の納入方法】

会報のウェブ配信にともない、従来、会報とともに郵送していた振込用紙による納入方法をあらため、下記銀行口座への振込みによる納入に変更いたします。ただし経過措置として当面の間、従来の振込用紙による納入にも対応いたします。詳しくはSELDAAホームページをご参照ください。(http://seldaa.net/)

振込先：三菱東京UFJ銀行京橋支店
普通口座 No.1173610
口座名義：上智大学英語学科同窓会

振込みに際し、会員氏名の前に卒業年（西暦）をご記入ください。（例：2001ジョウチタロウ）

また、入金処理を円滑に行うため、振込み後、SELDAAホームページにある「卒業生連絡フォーム」を用いて、送金の旨をご連絡ください。

会費の納入状況については、同じく「卒業生連絡フォーム」からお問合せください。できるだけ速やかに回答いたします。



編集後記

▼会報編集の最終段階で、学校法人上智学院人事局からソフィア会事務局を通して、羽鳥富美雄名誉教授が2012年3月7日に逝去されたとの報が届いた。享年85歳、ご葬儀は密葬にて執り行われるとのこと。謹んで哀悼の意を表する。

▼SELDAAがFacebookページを開設して、すでに1年が経過した。この1年、東日本大震災を筆頭に未曾有の困難が我々に襲いかかったが、他方Facebookなどのソーシャル・ネットワークを通じて、学生時代の友人や先

輩、後輩などと思いがけず繋がり、昔話に花が咲くだけでなく、今の時代に必要な情報を共有できることは、大きな喜びだ。

▼上智大学では、英語学科を含む外国語学部の将来像についての論議が進行している。前会報第52号の東郷公徳教授の記事に詳しく書かれているので、ぜひお読みいただきたい。

▼現役学生が直面する就職超氷河期の現実、英語学科として例外ではない。SELDAAでもキャリア・セミナーなどを実施して対処しているが、先輩としてより一層の支援を講じる必要がある。（HJS）



Sophia English Language Department Alumni Association

E.L.D.A.A. News

上智大学英語学科同窓会会報

発行：上智大学英語学科同窓会 〒102-8554東京都千代田区紀尾井町7-1上智大学英語学科事務室気付
Tel. 03-3238-3719 Fax. 03-3238-3910 URL. http://www.seldaa.net

No.
53